

大分県現代俳句協会句会報

第22号

令和5年8月31日発行

【令和5年 第1回雑詠句会選句号】

令和5年度の第1回雑詠句会には72名から21句が寄せられました。第22号の発行が事務局の都合で遅れましたことをお詫び申し上げます。冬、春の作品が多いのですが、選者になれば季節無関係で選考する機会が増えてきます。イメージを膨らませながら選句してください。投句していない新会員も選句をお願いします。作品を出す事、選ぶことが協会の基本の活動です。

令和五年、第一回雑詠句会の投句作品集

- 1 誰も喰わぬ柿の村なり存命す
- 2 夏の草一雨ごとにまた伸びる
- 3 コスモスに優しき母の面影を
- 4 妄想を鏡に写す冬灯
- 5 やむを得ず他人に譲る梅林
- 6 冬の夜や俳狂馬貞読みふける
- 7 喜寿の春亡き父母に感謝する
- 8 初日記千の実りの空澄みぬ
- 9 青空の句点となりて子守柿
- 10 朝顔に父の無口が咲いている
- 11 ボタ山の単線廃れ吸入器
- 12 コスモスの迷路が楽し園児の背
- 13 巡行の神輿舁く人拝む人
- 14 コート脱ぐようにこの世を脱ぎ捨てる
- 15 夕焼けて日の短さを思い知る
- 16 初蝶の移動スパー連れて来る
- 17 澄み切った底に妖しき水仙香
- 18 身中のマグマ鎮める蜆汁
- 19 落椿目覚の朝を疑わず
- 20 長いながい手紙ください冬薔薇
- 21 一炊の夢を運びし初雀
- 22 遠山を翼広げし村時雨
- 23 木枯や一步もひかぬ夫と妻
- 24 冬日向摩崖の仏笑みうかべ
- 25 初春や抽斗にある望郷歌
- 26 椿の実裂けて突きだす天狗鼻
- 27 文化の日ホームはひとり到着音
- 28 こがらしや頑固一徹家守る
- 29 ポケットは混み合ってます秋の雲
- 30 電子化においてけぼりの雪催い
- 31 何もないことの幸せ去年今年
- 32 春田道むかし物売りヤミ米も
- 33 地を這うて冬たんぼの坊がつる
- 34 冬うらら結婚式の待ち遠しい
- 35 旗二本アングル踊る初荷かな
- 36 朽ちてゆく家にも通る秋の風
- 37 福寿草もういいかいと春を呼び
- 38 蓬摘み色と香りを閉じこめる
- 39 思い出の6割の縮図に咲く万両
- 40 早春をピンクに染める君の恋
- 41 ふぐ刺しの箸も痺れる旨さかな
- 42 青とんぼお空の色にしているな
- 43 襟巻を忘れる程の句会かな
- 44 告知され眠れぬ朝に寒卵
- 45 ハイヒールの女足早二月尻
- 46 義仲寺や蕉翁枯野の夢眠る
- 47 ト書きなく筋書もなく去年今年
- 48 大根の思い出遠い雪の中
- 49 受験生ガンバレシル貼ってより
- 50 春昼の人込みに酔う天王寺
- 51 冬かもめ今日の釣果をお裾分け
- 52 枇杷の花母が忌日を咲きにけり
- 53 頬なでる風に桃の芽笑い出す
- 54 静か夜や体丸めて霜の声
- 55 冬晴や神木龍に化すところ
- 56 露の臺刻みいいことありそうな
- 57 歓声をスマホで撮す冬紅葉
- 58 恥じらいという遠回り蜆食ぶ
- 59 六七日の柚子湯に揺れる父の影
- 60 廃校の記念壁面に桜咲く
- 61 ボタ山は眠り昭和の夢をみる
- 62 寒星のすれすれに研ぐ色鉛筆
- 63 梅真白まだまだ村にある浮力
- 64 川蟬の漁は一瞬春近し
- 65 堰に来て膨らむ水や冬ぬくし
- 66 犬吠ゆる冬満月の爆心地
- 67 湯布院の春泥重き句碑めぐり

68 枯草や今しばらくは猫かぶり
 69 ハグだけで終わる再会花辛夷
 70 喜寿迎うこの元朝に深呼吸
 71 はちみつに漬けられた梅味見する
 72 誰も喰わぬ数多の柿の歓喜かな
 73 母と見る白球を追う初夏の空
 74 かなかなの声ひと夏を終わりにけり
 75 遣伝子が消えてしまった蝉時雨
 76 日向にて鶏めしつまむ梅の里
 77 赤黒き皆既月食のこの夜かな
 78 元旦の祈る言葉は家内安全
 79 柚子釜の臍に夜風の機嫌かな
 80 ペンを置き覗く万華鏡夜の秋
 81 月食は仙骨にあり虫時雨
 82 冬鷗湾一艦に傷みたる
 83 バレリーナ夢を踊りて冬の星
 84 菊日和サッカー一色明け暮れて
 85 ため息のようにさまよう春の雪
 86 冬リング仏壇にあげて増す匂い
 87 一つ知り一つ忘れて大根煮る
 88 藤麗わしだんまり杉の巻かれおり
 89 落椿と言えども好きな場所がある
 90 ひと言の後の沈黙春の雨
 91 精いっぱい燃えて浄土へ冬紅葉
 92 自分史の透明となる松の内
 93 無理ひとつ聞いてもらいしおでん酒
 94 稲刈の高揚解かすしまい風呂
 95 八千草に見張る至福九重の野
 96 寒卵割って方針くつがえる
 97 散る紅葉一期一会の樹となりし
 98 冬うらら期末試験の終りの日
 99 友がまた風となりゆく芒原

130 文化の日空回りするドアのノブ
 129 ひたすらに生きた褒美のメロン買う
 128 書き初めや太き筆には太き文字
 127 ミサイルの落下そのあと雑煮食う
 126 行く年や土下座した日の懐しき
 125 輪になつて炬燵を囲む家族愛
 124 書初に八十路入る手も震えがち
 123 若い日の顔はそのまま木の葉髪
 122 書込みの悲喜こもごもや古曆
 121 柚子の香を胸にあそばす三十日の湯
 120 寒紅に吐く息染めていざ一步
 119 妹のような恋人梅二月
 118 水仙を手折れば罪のひとつ増え
 117 春の色木の中ゆれるすずめかな
 116 早起の時間貴重や日脚伸ぶ
 115 門松に背中を押され告白す
 114 天空は北斎ブルー寒の明け
 113 結び松皇子に白浜冬日入る
 112 戦争を見ていて菜花はみにけり
 111 風かえれば雪の深さや春キャベツ
 110 覇を競うランナー孤独風二月
 109 ネクタイの仕方忘るる彼岸かな
 108 急ぎ足海猫つれて戻り船
 107 探梅や迷路のごとき風の道
 106 幸せが前線となる桜の国
 105 かじかむ手擦つてもなお指の皸
 104 ブロonzの神馬よく跳ね年新た
 103 早春の回覧板も小走り
 102 冬日向母の背さらに丸くなる
 101 粗野なれど無欲なわたし山笑う
 100 梅硬し手を合わすれば神となる

161 鼻歌で育てる母の菠稜草
 160 トンネルを穿たれながら山笑う
 159 秋深し夢はと聞かれ詰まる喜寿
 158 理由などなくて見ている冬的大海
 157 紅葉の落つ深き風にはらはらと
 156 不確かな十指や春を疑えり
 155 菊日和御堂に遊びし姉は今
 154 葱抱え今夜の団らん予想する
 153 十二月八日の宇佐に特攻機
 152 死にたさや今年漬けたる梅食べて
 151 篝火草胸にひとつの火種持つ
 149 この先は村を残して紅葉風
 148 松葉搔き黄金はありや落葉搔く
 147 気持ちだけホップステップジャンプ
 146 輦勤の朝を迎えて蜆汁
 145 噂上手海鼠のように口切らる
 144 台風来？筑後百年音楽会
 143 美しきものは枯野や文化祭
 142 あ頃を生きたからから風車
 141 椿咲く世の変遷にかかわらず
 140 はんなりとわが身にまとう春の雪
 139 逢えぬなら蕾のままに寒椿
 138 風花も乗り込んでくる観覧車
 137 大和三山部屋から望む朝霞
 136 棒で舞ふ一揆の構へ冴返る
 135 賛成も反対もせず咳一つ
 134 冬ぬくし猫のじゃれ合う出で湯坂
 133 迷わずに生きて氷柱の水しぶき
 132 床の間を背筋まさしく寒椿
 131 行く年をふるいにかけて前を向く
 130 鯁来ると江差の海は春めけり

193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162
 身の上を問わず語りに雪おんな
 病むことも上手くよりそう返り花
 一年に一度の主役除夜の鐘
 「ここだけ」の秘密が抜ける枯木立
 池の面の氷菓子のときモミジかな
 晩学を閉ざしとぎして山眠る
 うぬぼれを落して冬の山となる
 中東の冬PK戦の行方
 初鏡自問の果ての厚化粧
 いつまでも合わぬ計算秋の蜂
 山覚める理不尽通す人数多
 初夢の母高原に来ておりぬ
 戦せぬ法もつ春の増税論
 元朝の新しき箸二人膳
 節分や年の数程豆をまく
 女正月四人揃って姉しのぶ
 闊歩できないロングブーツの哀しみ
 靴の泥雪で拭きたる春隣り
 道教え派手ななりして先へ行き
 散歩道夕焼けドレスを纏う貝
 露の臺刻めば昭和匂い立つ
 寒月に心の傷を見透かされ
 モンキチヨウふうふ仲良く遊んでる
 美容師や若さと美貌の帰り花
 湯たんぽに母の温もり重ねけり
 売り言葉買って四方の山笑ふ
 東風待む菅公染みる都府楼址
 武器供与に賛成の我冬ざるる
 里芋の洗う姿の妻恋うる
 自然薯やフクシは錆びて納屋の隅
 春光のあふれる窓辺葉待つ
 青春の偉人の足跡辿る刻

195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162
 冬木の芽風に膨らむ試歩の道
 よう来たと廃校の庭花吹雪
 麦の芽の勢いと在る黒が好き
 目深に冬帽虚無僧の尺八
 春愁をチップスターで紛らわす
 神鈴をふればどこより雪堂
 脳幹をチューニングして春を待つ
 石菫の絮携帯電話のふいに鳴る
 露味噌が自慢の老舗の料理長
 冬耕の寡黙の背中山気満つ
 花柄の杖の歩幅や春の泥
 モツアルトの運命を聴く初御空
 児の作る餡入り餅の器量よし
 大根干す早朝だけの銀世界
 青き踏むルルドへ昇る曲り坂
 寒紅の濃き唇をフラワーデモ
 湯の町の丸みをおびたうかれ猫
 アクセルを踏んでとびこむ春の闇
 うららけし一と日を独り寺めぐり
 二人には理由などいらぬフリージア
 差し向かう夫のあご髭お元日
 葬ひとつつま先にある冷たさは
 春を待つ想い種播き終えてより

◆10句選十選評を同封の投句用紙で
 返送してください

今回の句会報が初めての会員が30名近くいますので、当協会の投句&選句について簡単に説明します。当協会の活動の基本は自分の俳句を他の会員に見てもらふこと、及び自分が他者の

作品を見て、その優劣を判断することです。そのため自分の作品を提出することを「投句」と言い、投句された作品の中から、自分が優秀だと思ふ句を選ぶことを「選句」と言います。

自分の絶対の自信作が、他の人には全く分かってもらえなかったり、逆に自信のなかった作品が高得点を集めるといふようなことがよくあります。これは自分の作品のよし悪しは、なかなか自分で判断できないということです。自分作者ですので、自分の作品の意味は良く分かっています。他の人は、書いてある文字でしか判断できません。期待に反して点が入らなかった作品は、表現（書き方）が悪くて通じなかったか、通じてはいるが、あなたが「おもしろい」

令和5年 第2回雑詠句会

〈 作品募集 〉

- ※第2回雑詠句会作品を募集します。ひとり3句で協会未発表のもの。会員に限りません。
- ※年2回の雑詠句会と、次号募集の自薦作品の計10句が特別選者による年間一句賞の対象になります。（3回揃わなくても可）
- ※締切は令和5年9月27日（水）まで。
- ※今回は分かりやすいように、第2回雑詠句会の選句・選評の締切と同じです。
- ※同封の投句用紙を使い、お近くのコンビニからファックスしてください。ハガキやメール等でも受けつけ可。宛先は事務局まで。

と思った内容を、他人はおもしろいとは思わなかったかのどちらかです。

こうして投句と選句を繰り返していく中で、自分の独りよがりの書き方（悪い癖）が分かってくるし、他人の表現のうまさにも学ぶことができます。

「たくさんの作品を作る、作っただけでなく発表して他人の評価を得る」ということと、「たくさんの選句をする、選ぶだけでなくその選句が当を得ているのかどうかを、自分の信頼する会員の選句と比べてみる」ということは、俳句上達の上で車輪の両軸です。どちらが欠けてもよい俳句作家にはなれません。

初心者は自分の作品に「何がどうしてどうなった」とみんな書いてしまいがちですし、同じような作品を選句しがちです。それしかできないのですから、もちろんそれがかまいません。

しかし同時に信頼できる先輩や協会の幹部は、訳の分からない作品を選んでいるなあ、これはどういう意味だろうか……と考えてみることも重要です。俳句の特質は「自分の心情をそのまま分かりやすく言葉で書く」のではなく、「ものやことに託すこと、暗示すること」ですから慣れないうちは難しいのが当たり前です。しかしこの難しさが俳句の醍醐味ですし、面白さの源ですから、分かってくると自分の作品が飛躍します。こうなれば百倍楽しくなります。

回りの人に尋ねても、いまひとつ納得いく答

えが得られなかったなら、事務局に聞いてみるというのも有効な方法です。事務局は会員をお世話するための部署ですから、気軽に利用してください。どんな種類のことでもかまいません。

それから大切なことのひとつに、「選評を書く」ということがあります。俳句は17音程度の短い作品ですから、簡単に分かると思われがちです。文学に興味がある人ほどそう思います。しかし初心者に多いのは、俳句全体を読むのではなく、俳句の中の単語やフレーズを取り出し、それを自分の感覚で適当につなぎ合わせて解釈することです。「うんうん、分かるなあ」などと言いつつ、その実、何にも分かっていなかったということがよくあります。これもある面しかたありませんが、こんな読み方から早く脱却して「作品中の文法に従って、書かれている通りに正しく解釈する」ことが大切です。詩は常識で判断できません。判断の根拠は作中の文法だけです。

自分はしっかりと読むことができているのか、その能力を知り、鍛えるのが「選評」書きです。思っていることは人には見えませんが、選評に書いた瞬間から思いが人に見える形になります。「君のこの解釈は間違っているよ」と指摘されるようになり、何よりも書くことにより自分の思いがはっきり意識されるようになります。おぼろげな認識では文章になりません。

せっかくのチャンスですから、自分流でかまいませんので「選評を書く」ことにチャレンジしましょう。書くことで上達が早まります。

● 第1回雑詠句会の選句と選評の締切も、3ページに載せた第2回雑詠句会の投句締切も、分かりやすいように9月27日と、同じ日です。

● 書き方の要領は、同封してあるFAX用紙を参照してください。

● 近くのコンビニからFAXで送ると50円で済み、安くて早いのですが、同じ内容を郵送やメールで送ってもらってもかまいません。

● この件に限らず、たいいていのことは事務局が融通をきかせます。杓子定規に捉えなくても、常識で判断いたしますのでご安心ください。



大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村王志



《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL: <http://www.gendaihaiku.net>

E-Mail: info@gendaihaiku.net